

名称	解説	
I 上代の文学		
	<p>日本史では「古代」という言葉が多く用いられますが、文学史では、平安時代より前を「上代」と呼ぶのが一般的です。その始まりは定かではありませんが、終わりの線は8世紀末に引かれます。政治的には国家が統一と制度の完成に向かった時代であり、文学との関わりで言えば、文字を持たなかった日本人が漢字という文字と出会い、漢字を使って表現する行為を、さまざまな形で試みて行った時代です。</p>	
上代の文学	<p>延暦13年（794）、都が平安京に遷るまでの、主に大和に都があった時代の文学。神話・伝説・歌謡・和歌・漢詩文・伝記・歴史・地誌などにわたりますが、全体の著作数は多くありません。また、内容は古い時代のもを含んでいても、著作としてまとめられたのは、現存するものはいずれも奈良時代（710～794）で、国家の体制の整備を背景に成立したものが目に付きます。</p>	
神話・歴史	<p>『古事記』は、和銅5年（712）成立。稗田阿礼が伝承していた古代の歴史を、太安万侶が筆録編集したもので、神代から推古天皇（在位593～629）までを収めています。『日本書紀』は、養老4年（720）成立。舎人親王撰。日本最古の官撰の史書で、神代から持統天皇（在位687～697）までを収めています。両書とも、神話・伝承や歌謡・和歌を多く含み、古代の日本人の感性と思想を知る上で重要な作品です。</p>	
地誌・伝承	<p>『風土記』は、和銅6年（713）に元明天皇が諸国に撰進を命じた地誌で、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の五箇国のものが現存します。各国の地理や物産のほか、地名などに関わる伝承を記録しています。『古語拾遺』は、齋部広成が大同等2年（807）に撰進したもので、『古事記』『日本書紀』を補う古代伝承の資料として注目されます（成立は平安時代初期ですが、便宜上ここに配列します）。</p>	
漢詩文・伝記	<p>『懷風藻』は、天平勝宝3年（751）成立。中国文学の影響下に生まれた現存する日本最古の漢詩集で、近江朝（667～672）から奈良時代中期までの詩約120首を収めています。撰者は未詳で、淡海三船・葛井広成・石上宅嗣などの推定説があります。また漢文の伝記として、惠美押勝・延慶撰の藤原鎌足と子息の伝『家伝』、淡海三船撰の鑑真の伝『唐大和上東征伝』が伝わっています。</p>	
和歌	<p>『万葉集』は全20巻で、何次かの編集段階を経て、奈良時代の末頃に成立したと考えられています。年代はほぼ舒明朝（629～642）から天平宝字3年（759）にわたり、作者は天皇から庶民に及び、約4500首を収めています。いわゆる万葉仮名で書かれているのが特徴です。主な歌人として柿本人麻呂・山上憶良・山部赤人・大伴家持らがあり、上代のみならず日本文学を代表する作品の一つです。</p>	